

日本の中国観Ⅵ ——最近在日本出版中国関連書籍報告 (2009.9-2010.8) ——

藤田 昌志

日本の中国観Ⅵ

关于最近在日本出版的中国书籍 - (2009.9-2010.8) -

FUJITA Masashi

《提纲》

从2009年1月到6月的汽车销售台数来看,美国为480万台,日本为218万台,中国达到了史上最高的609万台,居于首位。中国拥有13亿人口,在百年一次的经济大萧条中,中国609万台的汽车销售量令人惊叹。2010年5月1日到10月31日举行的上海世博会也呈现出一片盛况。虽然中国和日本之间还存在着经济差距,但我们可以看到中国留学生里也有经济优越的人。中国有变化,日本也有变化。为了了解中国,我再一次向大家介绍最近在日本出版的中国书籍。

キーワード: 文芸, 太子党, 外国語学習, 万葉仮名式命名法, 公共哲学

一、序

2009年1~6月の自動車販売台数は、米国が、480万台、日本が218万台に対して1位は中国で、過去最高の609万台であった。13億人の人口を抱える中国ではあるが、この「100年に一度の大不況」の中で609万台という売り上げの伸びは、反中主義者には面白くないことこの上ないであろう。2009年の中国経済は金融危機の影響を受けながらも、大規模の財政出動と思いついた金融緩和によって景気回復し、2009年の実質GDP伸び率は、前年比8.7%であった(日本の2009年の実質成長率は-3.4%であった)。2010年5月1日から10月31日まで開催された上海万博は、日本のマスコミ報道では当初は「上海万博^{バンバク}」(万博とパクリ(著作権無視の模倣)を掛けている)などと言っていたが、盛況であった。

日中間に経済格差は依然として存在するが、中国人留学生の中には裕福な者も見受けるようになった。10年前とは隔世の感がある。しかし、互いのことはまだよくわかっていない。お互いを知るにはやはり書物によるのが王道である。風聞や噂、テレビの報道で中国や他国を判断していることがあまりに多すぎるのではないか。本稿がいささかでも真実の中国(そして日本、東アジア)を知るよすがとなれば役割、使命は果たされたことになる。

二、最近在日本出版中国関連書籍報告 (2009.9-2010.8)

王志強 (2009.9) 『これが日本人だ!』 バジリコ株式会社

本書は「長年日本に暮らす「日本通」の中国人による日本人論」(訳者あとがき p.205)である。著者は王志強氏。1950年代半ば生まれで、現在、日中両国で経済技術協力に関するコンサルティング業に携わっている人である。

本書は第一章 集団至上主義、第二章 経済動物、第三章 島国日本、第四章 日本人の精神世界、第五章 勃興 の五章から成っている。第一章の1—日本における個人と集団 では小中学校の「イジメ」の問題が取りあげられ、日本語の「イジメ」のイメージは中国語の横暴かつ不当なやり方で抑圧し侮辱する=弱い者いじめ、という意味の“^{チーフ}欺負”よりも意味範囲が広く、重度の侵害、プレッシャー、侮辱、また間接的な軽度の迷惑、冷淡な目つき、冷笑などを含んでいて、およそ人を不愉快にする、耐え難くすることは、いずれも「イジメ」の範囲に入るだろうとし、「ともあれ日本人は感受性が強く、ちょっとした事でも侮辱されたと思いつく傾向がある」(p.29)と述べている。このことはルース・ベネディクトが『菊と刀』の第十二章 子供は遊ぶ で次のように述べていることと符合する。「一つの顕著な連続性が子供の生活の前期と後期とを結びつけている。それは仲間に承認されるということに非常に重要性が置かれるということである。」(ルース・ベネディクト 長谷川松治訳 (2006)『菊と刀』講談社 講談社学術文庫)、「彼の一生を通じて仲間はずれにされることは、暴力よりもなお恐ろしいことである。彼は嘲笑や排斥の脅威に対して、たんにそれを頭の中に思い浮かべたにすぎない場合においてさえも、異常に敏感である。」(同書 p.353)。

「日本人は現実における等級関係に関しては重視し、人と接する時には常に自分と相手のポジションの差異に細心の注意を払う」(第一章 1—日本における個人と集団 実用的な日本の階級 p.21)というのもベネディクトのいう「各々其ノ所ヲ得」(『菊と刀』p.60)に通底する。『菊と刀』と読み比べてみるのも面白いと思う。表紙の、ネクタイをした初老の男が芸者(?)に箸で日本料理を食べさせてもらっている写真は、日本人の「甘え」の感情を象徴的に表現しているようにも思われる。きまじめな日本人なら「バカニシテイルノカ?」と怒るであろう。

北方謙三(2009.9)『北方謙三の『水滸伝』ノート』日本放送出版協会 NHK 出版 生活人新書 300

2006年『水滸伝』全19巻で司馬遼太郎賞を受賞した北方謙三氏が中国の歴史や物語と小説創作の関係について語ったのが本書である。「NHK 知るを楽しむ・歴史に好奇心」(2008.9月放送)の『水滸伝』から中国史を読むの番組・テキストを元にして、新たに四、五、七、八、九を加えて構成したもので、平易な話し言葉で書かれていて読みやすい。

孟子の王道と^{はどろ}霸道の説を援用し、日本は「天皇家が連綿と続き、時の権力者すなわち覇者はさま

ごまに替わっていきますが、天皇家は変わらずに、王者として覇者の上であり続けるという考え方は「万世一系観」(p. 67)であるが、中国は王道霸道を一体化させ、王朝の交代によってドラマティックな変化を繰り返してきたとする(p. 68)。中国人は「非常に長いスパンで物事を考える特徴」があり、「恥」についても「一人の一生分くらいの時間を我慢すれば、回復されるという側面がある」(p. 128)が、日本人は「その瞬間に白か黒かを決めてしまわなければ、それはすでに拭いがたい恥だと感じてしま」う(p. 128)。日本の文芸は「個人の死」を重視する傾向があり、それは日本の哲学が常に「死」というものを考えてきて、さまざまな死生観を生み出してきたという事情と結びついている。中国では常に国家や世界観が重視され、個人的な死生観を説得力を持って人に伝えようとする姿勢は、中国の文芸にはあまり見られない(p. 129)とするのは首肯できる。北方氏は中国を通して日本について考えている。正統な日中比較文化論を展開していると思う。

副島隆彦 (2009.9) 『あと5年で中国が世界を制覇する』 ビジネス社

本書は日本人初の民間人国家戦略家、副島隆彦氏が中国と世界の近未来について予測し、論じた本である。副島氏は真の日中友好と「アジア人どうしは戦わず」(その考えは宮崎滔天^{とうてん}が中国革命同志会の孫文たちを助けた精神に戻ることもある (p. 40)) という旗を掲げ続ける (p. 3) 人で、2009年には中国の国内総生産 (GDP) が日本を抜き、中国は世界2位の経済大国になると予測する (本書の出版は2009年9月)。(2011年2月15日(火)、日本のテレビ等のマスコミは2010年の日本の名目GDPが約5兆4740億ドルとなり、中国の同約5兆8790億ドルを下回る結果となったことを報道した。)中国の米国債保有額は8947億ドルで世界第1位、アメリカは中国が保有する米国債を売却しないように懇願している (p. 29)。「1ドル=60円=2元」時代が到来するという (pp. 78-83)。世界の中心は中央アジアに移り、「海の時代から陸の時代へ」と変化し、中国の世界覇権を保証する (pp. 99)。ただし、中国には「二つの海底」問題があり、それを解決しなければならない。一つは共産党独裁という「海底」で、複数多党制と普通選挙による民主政治体制への道を示す必要がある。そのためには頑迷固陋な人民解放軍を退治して、1989年の天安門事件の民主化要求学生たちの名誉回復をしなければならない (p. 238)。もう一つの「海底」は台湾、チベット、新疆ウイグル自治区の三つの民族・人種・地域問題で、その自治権を認めなければならない。この「二つの海底」問題を解決しない限り、中国は世界に冠たる大国になれないと言う (pp. 238-239)。正論であると思う。

本書ではまた、胡錦濤・温家宝が鄧小平によって育てられた「汚れていない」中国指導者であること、次の10年の中国のトップ (第5世代) である習近平現国家副主席 (大統領)、李克強現國務院副総理 (首相)、王岐山現國務院副総理 (副首相) (() は予想) についても言及している。2009年12月に訪日し、天皇と急遽、会見したことで話題、問題となった習近平現国家副主席は共産党幹部の子弟である「太子党」^{たいしとう}の出身で、太子党は共産党一党独裁体制を堅持する冷酷な現実保守派で

ある。また、人民解放軍と組んで共青团派と対立しており、石油党で、江沢民前国家主席の率いる上海閥でもある (p. 118) ことなどが述べられている。拉致問題については当事者どうしの国の2国間で協議をするべきである (p. 184) というのは正論であろう。日本にそれだけの政治家、人物がないから「六カ国協議」に頼っているのが現状だと暗に副島氏は言う。

田村宏嗣 (2009.10) 『キーワード30で読む 中国の現代史』高文研

本書は「30のキーワードから現代中国の歴史」をたどった (p. 3) 書である。30のキーワードとは抗日戦争、百花斉放・百家争鳴、中ソ論争、教科書問題、靖国神社参拝問題、天安門事件、北京オリンピック、チベット・ウイグル問題などを指す。著者の文章のスタイルは朝日新聞の記者らしく(?)「客観的」かつ「冷静」な書き方であるが、一読して、とりわけ教科書問題、靖国神社参拝問題の項目の記述が知識の整理に最も役立った。

教科書問題は1982年に起きたもので、文部省(当時)教科書調査官が検定によって「侵略→進出」と書き換えたというのは誤報であった(検定前から『進出』『侵攻』であった)が、「侵略ということばをできる限り教科書から消していこう」というのは昭和三十年ごろからの文部省の一貫した姿勢だった (p. 138)。

靖国神社参拝問題については、中国や韓国との間で政治問題化するのは1985年8月15日の中曽根康弘首相の公式参拝からであり、A級戦犯14人は78年10月に靖国神社に合祀されたが、その事実が報道されたのは翌79年4月になってからであった (pp. 141-142)。昭和天皇は52年から75年までに7回、参拝しているが、A級戦犯の合祀問題以降は参拝していない。中曽根首相は中国の厳しい反発を受けて86年8月の公式参拝は見送った。靖国問題を再び政治問題化させたのは2001年4月に就任した小泉純一郎首相で、06年までに毎年1回、計6回参拝し、退任を控えた06年には総裁選の公約通り8月15日に参拝し、この間、日中間の首脳往来は先細りになり、外交関係は「政冷経熱」と言われるまでに冷え込んだ (p. 144)。安倍首相と福田、麻生首相はいずれも靖国神社には参拝せず、靖国問題はひとまず落ち着いた (p. 146)。

「日本の首相は靖国神社に参拝しない。その代わりに中国は日本の平和国家とその立場を認める。双方のナショナリズムに火がつく前に、日中間では互いの国民感情を傷つけない形での「暗黙の了解」ができあがったようだ。」 (p. 146)。日中両国の将来にとっては当然、そうであることが望ましい。

荒川清秀 (2009.10) 『中国語を歩く—辞書と街角の考現学』東方書店 東方選書37

本書は副題にあるように荒川清秀氏の中国の「辞書と街角の考現学」である。「机の前で辞書をにらみながら書くのではなく、街を歩きながら、現実の中国語を耳や目にしながらそれをエッセイ風

に書いていこう、これこそが自分が書きたかったものだ」(p. 292)という荒川氏は中国語学者であると同時にいつまでも柔軟な頭を持ち続ける求道者である。荒川氏の精神は伸びやかで探求心に満ちていて、未分化、混沌の現実を見事に整理し秩序づける。「語学の勉強とはコミュニケーションの楽しさはもちろん、外国語とつきあう中でぶつかる発見、驚きが楽しくてやっているのではないだろうか」(p. 293)という言葉に精神の柔軟さが端的に見て取れる。辞書を徹底して集めるのはフィロロジーを標榜する荒川氏の面目躍如で、その分類と説明において右に出る者はいない。中国語を専門としない者には一部、読み進みにくい箇所もあるが、それは読者のレベルの問題であるから致し方ない。

榎本泰子 (2009.11) 『上海』中央公論新社 中公新書 2030

本書は上海の政治・経済、あるいは都市文化の形成といった面で、主要な役割を果たした国の人々、イギリス人、アメリカ人、ロシア人、日本人、そして国家に帰属する人間だけではなく、難民として上海にたどり着いたユダヤ人を取り上げ、そのライフスタイルや意識を明らかにしたものである(pp. 18-19)。政治・経済の各面において支配の中枢に君臨したイギリス人と違い、アメリカ人が自由や個性の尊重といった精神面で大きな影響を与えたこと、ロシア革命を逃れてきた白系(帝政支持派)ロシア人が富裕層とそうでない層に分かれ、前者がフランス租界に住み、後者が工場などが多い共同租界北部や東部に住んだこと等、上海という都会がバラ色の世界ではなく、過酷な経済格差のもとに、住む地域によって富裕層かそうでないかが分かるころであったことなど現在の上海にもあてはまるのではないかという気がする。従来の上海本と違い、リアルな上海を知ることができる好著である。

楊逸 (2009.11) 『すき・やき』新潮社

楊逸氏は2008年『時が滲む朝』で芥川賞を受賞した中国ハルビン生まれの人である。高級牛鍋料理屋でアルバイトすることになった中国人女子留学生(大学一年生)梅虹智(通称ココちゃん)のアルバイト先での客とのやりとりや男友達の韓国人留学生、アルバイト先の店長とのことなどが20歳前の揺れ動く「乙女心」とともに表現されている。「乙女心」と括弧付きにしたが、楊逸氏の書くものはときに従来の日本人の「純小説」に慣れた感覚からは荒削りで、ぶしつけで無遠慮な、ステレオタイプな感があることもある。しかし、現在、日本にいる留学生の状況を伝えてくれる文章として読むと非常なリアリティーをもって迫ってくるものがある。留学生同士で話す「変な」日本語も日本人が「変」に思うだけで、自由に日本語を作りかえて使ってしまうそのバイタリティーにむしろ敬服すべきではないかと思う。規範主義の崩壊。少なくとも同世代の日本人よりは生命力に満ちているのではないか。楊逸氏の書くものの面白さは日本語で書きながら中国人臭が出てくること

があることである。「乙女心」などその例である。楊逸氏が今、現在の在日留学生の状況を活写し続けられることを祈ってやまない。

ワルデマール・アベグ ボリス・マルタン著 岡崎秀訳 (2009.11) 『一〇〇年前の世界一周 ある青年が撮った日本と世界』日経ナショナル ジオグラフィック社発行

本書は100年前に世界一周をしたドイツ人ワルデマール・アベグの写真と回想録を基にしてボリス・マルタンが文章を付け加えたものである。アメリカ、ハワイを経て極東にやってきたワルデマールは日露戦争後のポーツマス条約が調印された直後の日本に4ヶ月滞在し、日本美術や日本の食べ物、飲み物、銭湯、芸者、田舎を知り、日本に強い共感を持つ。次いで朝鮮に行き10日間滞在し、「礼儀正しいが、受身で押し黙った人たち」(p.150)とそこでの人たちの印象を書いているが、日露戦争後、1905年11月以来、日本が朝鮮を保護領とし、軍事、外交、治安、貨幣制度、通信網を支配したこと(p.150)が関係しているのだろう。ワルデマールは朝鮮で日本で買ったパノラマカメラを使って、高い山々や山の一部を飾る長い壁、古い寺など雄大な風景写真を残している。船で天津に到着したワルデマールは更に汽車で北京へ向かい、万里の長城を見物するため張家口に到着するが、そこで撮られた万里の長城は素晴らしい。どこまでも続く雄大な長城は悠久の歴史を彷彿とさせる。ワルデマールは万里の長城だけでなく、何によらず、そのスケールの大きさに圧倒された。「通りすがりの旅行者にとって、世界史に偉大な影響を与えた広大な国について述べるのは難しい。その文化遺産、都市、川や山、砂漠、ここで見たすべてのもの、経験したことのすべてが並はずれて大きいのだ」(p.168)と述べている。上海には「私のような旅行者を惹きつける魅力がさほどない」(p.178)と長く滞在していない。本書によって当時、アメリカにすでに高層ビルがあったことなどが写真でわかるし、世界の中で日本、韓国、中国等をとらえるいいきっかけになる書である。

荒川清秀 (2009.12) 『体験的中国語の学び方ーわたしと中国語、中国との関わり』同友社

本書は荒川氏が外国語学習に関して「体験を中心に、日本にいて自分なりの勉強法を身につける方法について」話し、荒川氏と「中国語、中国とのかかわり」を書いた(はじめにp.11)書である。

荒川氏は日本語との違いを自覚し、中国語と日本語を格闘させていくことが中国語力を高める上で大きな武器になる(p.8)という。日中対照言語学を専門とする荒川氏の重要な指摘である。日中対照は一専門ではなく中国語学習上の必須事項なのである。「たくさん読むことで「言語経験」を豊かにする」(p.19)というのは単純な会話段階で留まってしまうのを打開する方途を提示している。「ラジオ講座で読みの練習の時、読み終わって時間があれば、もう一度読むのである」(p.45)という氏はまじめで勤勉、一生懸命な方である。「日本語との違いに気づいたときはうれしくてたまらなくな

り、ついみんなに吹聴してしまう」(p. 14)、「論文を書くとともに能動的にな」り、「何かのテーマについて調べ出すときは気持ちがとても高揚する」(p. 83) 荒川氏はいつまでも若々しい先生である。

氏の勉強法については本書を読んでいただくとして、荒川氏の師である「香坂先生」と「寺村先生」について書かれているのが印象に残った。寺村先生がいつも「これは普遍性とどうつながりますか」ということを聞き、「きみのやっているのはフィロロジやね」と言われたこと(p. 244)、「この問題よくわからないなあ」と言って結論を保留するのは寺村先生の口癖だった(p. 247) ことなど寺村先生の人柄、気質を彷彿とさせる。一方、香坂先生は荒川氏の質問にすかさず答える人であった(p. 247) という。人に誤解されることも多く、人がついていけないこともあった香坂先生である(p. 251)が、荒川氏は次のように香坂先生をしのび、師を賛嘆している。「香坂先生に反発しつつも、わたしは先生のことが好きだった。先生の笑顔は魅力的だった。先生はよくわたしたちをお寿司屋さんに入れて行ってくれたり、喫茶店に入れて行ってくれたりした。ほのぼのとした関係であった。」(p. 251)。

趙紫陽 バオ・プー ルネー・チャン アディ・イグナシアス 訳者 河野純治(2010.1)

『趙紫陽 極秘回顧録 天安門事件「大弾圧」の舞台裏!』光文社

趙紫陽は1989年4月15日、胡耀邦の死去により学生運動が発生した際に、天安門広場のデモ学生と会い(同年5月19日)、即席の演説を行って学生が広場から退去するよう訴えた。それが公の場に姿を見せる最後となった。その後、16年間にわたって隔離、自宅に軟禁され、2005年1月17日に北京で死去した。極秘のうちに録音テープに回想録を残しており、それをもとにして出版されたのが本書である。

本書の序文でロデリック・マクファーラーは次のように述べている。本書の内容を簡潔にまとめたものとなっている。曰く「本書に収められているのは、趙紫陽の首相、党総書記時代の経験、自宅での軟禁生活などについての彼の個人的な記述である。そこでは、鄧小平の忠臣たち——党総書記の胡耀邦と首相の趙紫陽——が彼の改革を推進するために立ち向かった北京の高次元政治の悪意に満ちた世界が詳細に語られている。これまでも欧米の研究者たちによって記録されているが、本書では表面化した混乱の裏にあった内部の権力抗争の実態を知ることができる。」(p. 22)。本書で趙紫陽は民主主義を目指す「善玉」として描かれ、一方、鄧小平は政治的には共産党独裁を唯一絶対のものと考え、民主主義を受け入れない者として、また保守派の長老である陳雲や李先念は(そして李鵬も) 趙紫陽に反対する頑迷固陋な「悪玉」として描かれている。

杜導正は中国語版序文の末尾で「趙紫陽失脚の根本的な原因は結局、中国の政治体制改革が経済体制改革に付いていけなかったことだ。われわれは趙紫陽や胡耀邦に学んで、彼らの遺志を引き継ぎ、政治体制改革を進めていかなければならない」と書いているとのことであるが(p. 473)、本書は

「西側の民主主義制度」が最もすぐれた政治制度であり中国もそれにならうべきであるとする視
点に立っている。本書の情報としての価値は高いが、古くさい体制論、制度論の陥穽に陥らないよ
うに注意する必要がある。もはや我々は中国を一段、低いものとして見ることに安住していればい
い時代には生きていない。趙紫陽が天安門で即席の演説を行ったときの写真が本書に掲載されてい
るが、その写真で趙紫陽の後ろに立っているのは温家宝氏である。趙紫陽氏の遺志は温家宝氏によ
って引き継がれているのである。日本にいる我々は 100 年ほど前の辛亥革命の際、明治維新を行っ
た日本が中国に対して後れてきた後輩を見るような視線を投げかけていたことを知らねばならない
(子安宣邦氏の『日本近代思想批判——国知の成立——(岩波現代文庫—学術)』などに詳しい)。現実
の中国の政治を批判するのはたやすい。問題は批判して「日本は中国よりましだ。」という考えに安
住することである。もう中国批判に安住できる状態でなくなっていること、真の「友好」の道を模
索するときが来ていることに気付くべきである。

平川祐弘 (2010.2) 『日本語は生きのびるか——米中日の文化史的三角関係』河出書房新 社

本書は副題の方が内容をよく表している。「二本足の人は、さらに三本足の人となり、三点測量が
出来るようになることが望ましい。(中略) 米国と日本に^{またが}跨るような人も、中国と日本に跨るよう
な人も二本足の人である。米国にも日本にも中国にも足をおろして測量できるような人が三本足の
人である。」(p. 116)、「日本人は過去において大陸から漢文化を取り入れた。そのような過去の日本
について「漢文明によって汚染された」と声高に非難する気が私にはない。それと同様に、今日の
日本について「西洋文明を排除せよ」と主張する気もない。私は歴史上の過去に理想の時代を描い
て復古を夢みる人ではない。現在の混淆文化ないし雑種としての日本、いいかえると広い意味でク
レオール化している島国日本の歴史的事実をありのままに肯定して、その中にプラスの要因を求め
ている。」(p. 132)、「日本が必要とするのは、バランスの取れた^{たりきしゃ}多力者である。多力者を養成せねば
ならない。多力者とは日本と外国、現在と過去、そうした文化の三点測量のできる人のことである。
そしてそれには古典の知識がなにかと有利に作用する。つまり、私どもは英語をはじめとする西洋
語の言語能力とともに、日本の伝統文化も、学ばねばならない。」(p. 182)。本書の著者、平川氏は
東大名譽教授でフランス、イタリア、ドイツの留学経験を持ち、東大教養部でイタリア語、フラン
ス語を教え、北米、中国、台湾等で教壇に立った人である。「三点測量」は本書のキーワードである
が、では個人のアイデンティティーはどうなるのかというところ「二本足を複数の文化におろして安定
を図ることができれば、自己の主体性を生かしてたくみに変化に対応できるのではあるまいか」
(p. 137) と楽観的である。この人は超エリートである。なにか文章が平板でアクセントがなく読み
にくい感じがするのは国際化の波の中で時に苦しむこともある庶民の気持ち分らないことに帰

因するのではないかと思う。

阿辻哲次 (2010.3)『漢字と日本人の暮らし』大修館書店

本書の趣旨はあとがきに詳しい。曰く「はるか昔に中国で生まれた漢字は、早い時期に日本にも伝わり、これまでの長い時間にわたって、それぞれの国で独自の発展を遂げてきた。いつの時代においても、中国と日本における漢字文化には、重なっている部分と異なっている部分があった。重なっている部分は東アジア地域の文明を発展させるために機能した部分であり、異なっている部分は、それぞれの国の言語と文化的状況に適用するようにと加えられた改良の結果である。本書ではその異なっている部分の分析を通じて、日本における漢字のあり方を見つめ直そうと考えた。」(あとがき pp. 164-165)。日本で最近、出版された中国関連書籍について報告し、分析するのが目的であるが、「中国関連」を拡大すれば日本も含まれるので、こうした本の報告、分析も行う。元来、日本のことを知ろうと思えば中国のことを知らないわけにはいかない(内藤湖南の説は正しいと思う)、筆者は中国だけでなく日本文化も研究しているのでこうした本も取り扱う。さて、では具体的に「中国と日本における漢字文化」の「異なっている部分」とはどんなところかということ、阿辻氏はたとえば日本の「**万葉仮名式命名法**」を挙げる。「万葉仮名式命名法」とは漢字で書かれる日本人の名前で、漢字の意味ではなく発音だけを使ったもののことを指し、特に女性の名前に多いと言う。たとえば「由香利」は「縁」とか「血のつながり」という意味の和語「ゆかり」に由来するのであり、漢字で書くなら「縁」と書くべきだが、漢字で「由香利」と書くのは、それぞれの漢字の発音だけを使って意味を切り捨てた使い方、まさに万葉仮名と同じ使い方である(p. 59)。そして使われているのは漢字の発音だけだから「由香利」と書いても「由佳里」と書いても「友加里」と書いても本来はいいはずなのに、「由香利」さんに宛てた手紙の宛名に「由佳里」や「友加里」と書けば不機嫌になれるのは目に見えている。それぞれの漢字の意味を機能させているのではないが、「全体としてはその漢字の並びがほかでもなく自分のアイデンティティ」なのであり「ここに日本人が名前の漢字にこだわる大きな意識がある。」(p. 60)。漢字という「表意文字」を「表音文字」として使い、更に「表意文字」化するのが日本で、それが「中国と日本における漢字文化」の「異なっている部分」の一つであるというのである。見事な説明である。

阿辻氏はまた本書で中国(東洋)の歴史を一本の長大な巻き寿司にたとえる「巻き寿司論」を述べている。「カンピョウ」は巻き寿司のほとんどの部分に使われるので、「文字」に置き換えられるし、「三つ葉」や「シイタケ」(ある地域の巻き寿司には使われない)は「経済」や「教育」に読みかえられる。「音楽」や「軍事」と読みかえられる各種の具もこの巻き寿司には巻きこまれている。これまでの漢字の研究は書体や芸術的達成度を物差しとして考察された、漢字の通時代的研究であり、「この方法では、漢字を実際に使ってきた人間の姿がほとんど見えてこない」、「巻き寿司論」な

ら、それぞれの時代に文字が政治や経済、または芸術や教育といったほかの事象とどのように関係し、依存してきたかを、包丁を入れた時代ごとに見比べることができ、文字とそれを使う人間の関係を、共時代的な次元でとらえていくことができる (p. 158)。

それが阿辻氏の目指す「文字と人間の関係の研究」である。「巻き寿司論」にはオリジナリティーのある、本来の京大の学者の面目躍如たるものが感じられる。

宋文洲著 田原総一郎責任編集 (2010.3) 『中国人の金儲け、日本人の金儲けここが大違い!』 アスコム

本書は田原総一郎氏と宋文洲氏の対談集である。タイトルのように「金儲け」だけを扱ったものではない。本書のキーワードは「大」(だい。大きいこと。)である。「大日本帝国」で失敗し「経済大国」として成功した日本は今や「大企業」が立ち行かなくなっていると両氏はいう。1980年代までのシェアを拡大し、大量生産、大量販売する(「大企業」の)ビジネスモデルは、90年代以降の「多様なニーズに対応しなければならない時代には時代遅れのものとなり(「大企業は環境があまり変化しない安定成長の時代向き」(p. 75)、現在は「必要な継続性をたもちながら、徹底的に反省し、自己否定し、転換していく」(p. 115) 時代である。他人を変えたり自己中心に他のものを吸収したり変えたりすることが得意で、環境に適するように自分が変わることが不得意な (pp. 74-75) 「大」(「大企業」)の時代ではないという。現在は「小」の時代で、実際の巨大オフィスや倉庫、店舗のいらぬバーチャル店舗、ネット販売、インターネット、パソコン、携帯はその象徴である (pp. 91-92)。

宋文洲氏は裸一貫で日本に来て北海道大学大学院で学び、1992年にソフトブレーンを興して大成功し、企業経営者、経営コンサルタントとして、その名を轟かせた典型的な中国人 (pp. 6-7) である。「生きる力」とは「失敗に耐える力」だと思う (p. 182) と言い、華僑は失敗を繰り返しながらやってきたし自分もそうだという。失敗して無一文になっても、またチャレンジする、そのエネルギーはどこから来るのかと田原氏が聞くと、小さい頃からの経験だと思う、人間は日本人も含めて、その経験をみんな持っている、しかし、若いうちに磨かないと錆びついて、なくなってしまうと答えている (p. 183)。苦勞を厭わない、失敗に負けない中国の人である。

平凡社編 (2010.3) 『白川静読本』 平凡社

本書は2006年10月に96歳で亡くなった中国文字学の碩学白川静氏への鎮魂歌である。「白川氏はほとんどすべての漢字を神の世界との関係で解釈する。このような漢字の大胆にして、しかも首尾一貫した論理性をもつ解釈をした学者は、世界にも白川氏を除いては存在しないであろう。」

(p. 105) という梅原猛氏の言葉は的確に白川氏の本質を言い当てている。梅原氏は白川文字学を象徴的に表す有名な例として、「道」という漢字について白川氏が「「しんにゅう」は道を表し「古

代中国では異族の国へ行くときにはその異族の首を持っていくので、「道」という字ができた」(pp. 104-105) とする例を挙げている。加地伸行氏は形・音を中心とする表音性に立つ藤堂明保・東大教授に対して、形・義を中心とする表意性に立つ白川氏を高く評価し、表意性に立つ白川学に基づかなければ、中国古代社会の実相を解明することは困難であった (p. 109) と述べている。非常に深い白川文字学理解である。加地伸行氏はイデオロギーによって大学院から石もて追われたとき、白川氏を希望の光として私淑したと言う (p. 108)。

岡部牧夫 萩野富士夫 吉田 裕 編 (2010.4) 『中国侵略の証言者たち-「認罪」の記録を読む』岩波書店 岩波新書 (新赤版) 1242

本書は第1章 「認罪」への道 で中国での日本人戦犯の認罪の過程を、第2・第3章で起訴された四十五名の供述書によって日本の侵略行為の具体的様相を明らかにする。第4章では帰国した戦犯たちが日本社会でどのように受け止められたか、またどう活動したかが語られ、第5章では起訴をまめかれて帰国し、元戦犯の社会活動をになった一人の当事者の体験記が記されている (はじめに viii)。第4章では帰国した「釈放戦犯たちは、周囲から「アカ」扱いされて差別されただけでなく、公安警察関係者による執拗な接触や監視に悩まされ、日本社会のなかで孤立を深めていった。」(p. 154) と述べられている。このことは日本人が15年戦争について戦後も真正面から向き合うことがなかったことを如実に物語っている。2010年は日韓併合100周年である。同様なことが言えるのではないだろうか。

金泰昌編著 (2010.5) 『公共哲学を語りあう 中国との対話・共働・開新』東京大学出版会

聞き慣れない「公共哲学」とは基本的に三つの考え方が相互連動しているものであるという。三つとは、曰く①「公共の哲学」=市民の立場から思考し、判断し、行動し、責任を負う哲学。②「公共性の哲学」=「公共性」とは何かという問題の学術的究明を目指す専門家思考の哲学。③「公共(する)哲学」=「公共」を動詞として理解し、実践・活動・運動という側面・局面・観点から考えること (pp. 46-47) を指す。これだけではわかりにくいのが、「公」と「私」を相対的二元論でとらえず、「公」と「私」と「公共」の相克・相和・相生的三元思考を基軸として自己と他者と世界を相互連動的に捉える (p. 47) と言い、日・中・韓について、中国は「理」への傾向が強い文化で、日本は「場」に対する感覚が敏感な文化、韓国は「気」の影響が何事にもあらわれる文化である (p. 75) とその三元思考を援用するとき、説得力のある、今の時代に合った考えであることが理解できる。また、存在論の観点からも、日本・韓国・中国を論じている (p. 137)。詳しくは本書をご覧ください。全体主義について「要はすべてのものごとを一元化・同質化・統合化し、多元性・異質性・多様性を認めないということ以外のなにものでもありません」(p. 357) と言い、「公」(全体主義は「公」

の悪しき形態)と「公共」、「私」の健全な、望ましい、あるべき関係を探究する。「公共」を「私の積極的な肯定」を通して、「公」の閉鎖性・抑圧性・独善性を開放・解放・改革するための活動・運動・連動と位置づける(p. 358)。「公」、「私」二元論を超克し、日・韓・中で考える、待望していた新しいタイプの本である。金泰昌氏は1934年生まれ。来日(1990年)以後、『公共哲学』全20巻等多数の著作のある公共哲学共働研究所長。

田中宇^{さかい} (2010.6)『米中逆転—なぜ世界は多極化するのか?』角川書店 角川one

テーマ21

本書の言う米中逆転とは米国と中国という二国間のバランスの逆転ではなく、それぞれが代表している「先進諸国」と「新興諸国・発展途上国」の間の政治、経済両面での力関係の逆転を意味している。そして、世界体制の多極型への移行(多極化)(著者は様々な面からそのことを立証している)は、「中国が米国を押しつけて台頭することによって起きるのではなく、米国が自滅的に覇権を崩壊させ、米国が多極化を誘発する結果として起きる」(pp. 82-83)とする。この考えはありきたりの中国脅威論、中国災厄論とは一線を画するもので、中国が米国のような世界支配型の国家でないという基本認識から生まれてくるものである。筆者は言う。「中国は、東アジアから東南アジア、中央アジアといった自国の周辺地域においては覇権国になりつつあるが、その外の世界については、政治的な影響力を行使しようとしていない(経済的な影響力、つまり中国企業の儲けという点は行使しようとしているが。)」(p. 5)。米国の自滅的な覇権崩壊はそれまで対米従属の国是を維持する機関として機能してきた日本の官僚機構を機能不全にし、その国家権力は地域に分散される、すなわち地方分権が推進されると筆者は考える。また、日本の国是は対米従属からアジア重視へと転換していくと予測する(p. 80)。時代を見据えた正論である。もっともアジアがすべていいわけではなく、日中などアジアの人々は「政府や上司の言いつけを守ることはできるが、自分の頭で考える訓練をほとんどやっておらず」、日本の場合、企業は企業を超えた国家システムや世界のなかでの日本勢のあり方について、すでに欧米人が作ったものの上に乗って動くことしかやっていないし、中国は共産党の単独独裁体制が続く限り、個人の自由な思考の涵養が阻止され、そのため中国がアジアの覇権国になっても世界システムを切り盛りできず、欧米の多極主義者に黒幕的に思考してもらい、中国は隠然とその言いなりになるしかない(p. 136)とその弱点も正鵠に指摘している。世界について権威のある人や機関の発表によらず自分で「勝手に考える」ことこそ、欧米が覇権を握る際に重要だったことなのであり、東アジアが権威重視を乗り越え、「勝手な思考」を重視するようになり「本質的な世界の多極化」を実現するにはまだまだ時間がかかると言う。著者は柔軟な頭と鋭い分析力のある、現在、メールマガジン「田中宇の国際ニュース解説」を配信している人で、その読者は18万人を超えるという。

重光克昭 (2010.8)『中国で一番成功している日本の外食チェーンは熊本の小さなラーメン屋だって知ってますか?』ダイヤモンド社

本書は台湾生まれの父を持つ、「味千ラーメン」二代目社長の国際ビジネス奮闘記である。「味千ラーメン」は1968年に熊本市で創業。国内に102店舗を展開、中国では日本の4.5倍に当たる約450店舗のチェーンを展開している。「約450店舗」というのは「年間数十店から100店舗前後、多いときには3日に1店舗ものペースで次々と新店がオープンするから」で、店舗数で「味千ラーメン」は「中国で最大の日本食チェーン」であることに間違いはない(はじめにp.2)。

1994年に父親は長年の願いを実現して台湾に進出。しかし、台湾側経営者(もともと台湾で製麺業を営んでいた)が台湾人は熊本人と違って柔らかい麺が好きだからと麺を勝手に柔らかくしたり、台湾人が薄味のスープを好むからと麺とのバランスを無視してスープの味つけを変えてしまったりして、「味千」のマニュアルどおりにラーメンを作らず、店は閑古鳥が鳴くようになってしまった。重光氏はいう。「郷にいれば郷に従え」という言葉があるように、われわれも現地の好みを無視してまで日本のラーメンを押し付けるつもりはありません。だからといって、麺とスープのバランスが減茶苦茶なまずいラーメンを「味千ラーメン」の看板でお出しするわけにはいきません。」(p.68)。北京でも合弁相手が要望を聞き入れず、わずか数年で合弁を解消した。「これらの失敗を通じて確信したのは、現地の好みは無視できないけれど、「味千ラーメン」本来の味を守るために、決して妥協してはいけないということです。そして、そのわれわれの思いを受け入れて、きちんと守ってくれる合弁相手(パートナー)を選ばなければならないということでした。」(p.69)。ここに「味千ラーメン」が海外、なかんずく中国で成功した秘密の鍵がある。「譲れないところ」と「譲るところ」を明確に分けているのである。

やがて香港人のリッキーとデイシーというパートナーが向こうからやって来て、「味千ラーメン」は中国で大発展する。香港では日本料理は高級料理であったが、本物の日本料理をリーズナブルな価格で提供する店が少なかった点にリッキーは目を付け、香港の「味千ラーメン」は現地でポピュラーな日本食メニュー(たとえば寿司や雑炊、弁当、揚げ出し豆腐、枝豆、銀ダラの西京焼きなど)を数多く用意した。大陸ではまず最初に深圳^{しんせん}に出店した。深圳では週末になると、隣接する香港から境界を越えて数万人から数十万人もの香港人が押し寄せる。香港より物価の安い深圳で食事やショッピングを楽しむためである。深圳を選んだのは香港で成功したビジネスモデルがすんなり受け入れられやすい土壌だと思ったからである。上海では黒っぽいインテリアの方が高級感やステータスを感じるようなので、黒字に赤い文字の看板に変更し、大規模レストランの方が繁盛するのでそれに合わせた。「譲るところ」は譲り、「譲れないところ」は譲れないとメリハリをつけているのが本書を読むとよくわかる。

売り上げが見込める沿海部主要都市をターゲットに据え、2009年末時点で店舗数は上海市が92店

舗、深圳市が36店舗、江蘇省が35店舗、広東省が31店舗 (深圳市を除く)、北京市が31店舗である (p. 141)。

1994年、台湾に「味千ラーメン」海外1号店を出店して、わずか15年足らずで約500店を海外に出すことに成功した重光氏は言う。「より多くの人に「味千ラーメン」のおいしさを堪能していただき、父が望んでいたように、世界中にラーメン大好き人間が一人でも増えてほしい。その念いを成し遂げることが、わたしにとっての成功なのです。」(はじめに p. 7)。根本に「金」(アメリカニズムの根本)ではなく「感謝」と「奉仕」(p. 6)(東洋の精神)がある。父親の時から「のれん分け」した店からロイヤリティーは一切取らず、国内でのフランチャイズ展開が本格化してからも、月々5000円(現在は1万5000円)という低いロイヤリティーを受け取るだけにとどめている (p. 179)。当然のことながら重光氏に中国、アジアを下に見る考えは全くない。

引用文献・参考文献

- (1) 王志強 (2009. 9) 『これが日本人だ!』バジリコ株式会社
- (2) 北方謙三 (2009. 9) 『北方謙三の『水滸伝』ノート』日本放送出版協会 NHK出版 生活人新書300
- (3) 副島隆彦 (2009. 9) 『あと5年で中国が世界を制覇する』ビジネス社
- (4) 田村宏嗣 (2009. 10) 『キーワード30で読む 中国の現代史』高文研
- (5) 荒川清秀 (2009. 10) 『中国語を歩く—辞書と街角の考現学』東方書店 東方選書37
- (6) 榎本泰子 (2009. 11) 『上海』中央公論新社 中公新書2030
- (7) 楊逸 (2009. 11) 『すき・やき』新潮社
- (8) ワルデマール・アベグ ボリス・マルタン著 岡崎秀訳 (2009. 11) 『一〇〇年前の世界一周 ある青年が撮った日本と世界』日経ナショナル ジオグラフィック社発行
- (9) 荒川清秀 (2009. 12) 『体験的中国語の学び方—わたしと中国語、中国との関わり』同学社
- (10) 趙紫陽 バオ・プー ルネー・チャン アディ・イグナシアス 訳者 河野純治 (2010. 1) 『趙紫陽 極秘回顧録 天安門事件「大弾圧」の舞台裏!』光文社
- (11) 平川祐弘 (2010. 2) 『日本語は生きのびるか—米中日の文化史的三角関係』河出書房新社
- (12) 阿辻哲次 (2010. 3) 『漢字と日本人の暮らし』大修館書店
- (13) 宋文洲著 田原総一郎責任編集 (2010. 3) 『中国人の金儲け、日本人の金儲けここが大違い!』アスコム
- (14) 平凡社編 (2010. 3) 『白川静読本』平凡社
- (15) 岡部牧夫 萩野富士夫 吉田 裕 編 (2010. 4) 『中国侵略の証言者たち—「認罪」の記録を読む』岩波書店 岩波新書(新赤版) 1242
- (16) 金泰昌編著 (2010. 5) 『公共哲学を語りあう 中国との対話・共働・開新』東京大学出版会
- (17) 田中宇著 (2010. 6) 『米中逆転—なぜ世界は多極化するのか?』角川書店 角川one テーマ21
- (18) 重光克昭 (2010. 8) 『中国で一番成功している日本の外食チェーンは熊本の小さなラーメン屋だって知ってますか?』ダイヤモンド社